

書 評

位藤俊一 (編)

乳房画像診断最前線—超音波診断を中心に

評：遠藤登喜子 (独立行政法人国立病院機構名古屋医療センター高度診断研究部・放射線科)

本書は37名の共著による乳房の画像診断を臨床的観点からまとめた書である。超音波診断を中心にマンモグラフィ、CT、PET/CT、MRIと、乳房に関わる画像診断を、あくまで「臨床家」の観点で、画像診断を臨床に用いる場合には画像の基本を理解して欲しいという方針で作成されており、乳腺診療をこれから始める、あるいは現在も乳腺診療に従事しているけれど画像理論は避けてきた方々にも、無理なく手に取ることができる。

構成は、いきなり、「乳房超音波画像診断における新しい技術と他のモダリティの位置付け」で始まり、続いて乳腺疾患の概念を伝える「総論：病理」、続いて各論としての「超音波検査の従来法と新技術」、「超音波以外の主な検査法(各モダリティによる評価の基本)」と技術の解説が続き、続いて「ケースファイル」により頻度の高い疾患の紹介され、「術前画像評価による治療方針の決定」では薬物療法の治療効果判定、ラジオ波焼灼療法や凍結療法実施のための画像診断と治療効果判定、画像ガイド下のインターベンションなど、治療チームを意識した内容が展開されている。

各章とも読み応えのある内容であるが、特長の1つは、臨床家にわかりやすい記述での画像技術の解説にある。超音波に関しては詳しく、「Bモード評価の基本」では所見用語を解説し、以降の各検査法について、①原理、②検査手順、③臨床評価、を展開している。カラー Doppler では原理から調整・検査手順が初心者にもわかるように述べられた後、乳腺腫瘍のみならず、リンパ節の評価も1項目として取り上げられている。エラストグラフィについては、普及度の高い日立メディコ社のエラストグラフィのほか、SIEMENS社のAcoustic Radiation Force Impulse (ARFI) を利用したエラストグラフィと組織硬度の定量測定法、GEヘルスケア・ジャパン社の静的エラストグラフィ、東芝メディカル社の組織Doppler法を利用したエラストグラフィと、多種類の画像取得法が紹介され、難しい原理の話は敬遠したいと思ってきた者でも興味を持って読み進むことができる構成となっている。

さらに、超音波のCAD、3D/4D、造影超音波と続き、造影超音波では、基礎、原理、ソナゾイド造影の現状として文献的考察のあと、リンパ節評価にも拡張している。加えて、リアルタイム超音波断層検査(RVS)の項目が設定されており、超音波に関する現時点での手技はすべて網羅されている。

もう1つの特長は、ケースファイルである。超音波・マンモグラフィ・MRIと、通常診療に用いる画像の供覧に、鑑別診断、具体的診断の流れ、そして病理像が提示され、画像所見の考察がついている。病理像も鮮明で画像へのfeed backができるところが非常にありがたいところである。こうした症例集を時間のあるときに1例ずつ読み込んでゆくことにより、おのずと画像診断のポイントが習得できるように思われる。

以上、本書の特長をまとめると、徹頭徹尾、臨床に軸足を置いた書であり、画像診断を用いて現在実現できる最良の乳癌の医療を提供する臨床家を援助し意欲を湧き立たせるものであるといえよう。



定価：本体 8,500 円＋税、南江堂 刊
ISBN：978-4-524-26211-3
A4 判，280 頁，2013 年 7 月刊行